

氏名(国籍)	チャイス克蘭 ヒランブルック (タイ)		
学位の種類	博士(社会学)		
学位記番号	博乙第1,259号		
学位授与年月日	平成9年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	社会科学研究科		
学位論文題目	Human Aspects of Thailand's Industrialization : Cultural Realities and Economic Myths (タイ産業化の人的側面：文化的現実と経済的神話)		
主査	筑波大学教授		駒井 洋
副査	筑波大学教授	博士(文学)	小野澤 正喜
副査	筑波大学助教授		濱 日出夫

論文の内容の要旨

タイ社会はかつて上座部仏教により教導されており、人びとの価値観や行動は聖性にもとづく儀礼として存在していた。この数十年間の産業化の帰結として、聖性は崩壊して俗性が支配的となり、人びとの行動や価値観はアノミーへといちじるしく傾斜してしまった。このことを、質問票による調査、識者へのインタビュー、日系企業従業員からの聞き取りなどのデータより実証しようとするのが本論文の目的である。本論文は、5章と付録から構成されている。

第1章は「アノミーへと向かうタイ変化の将来傾向」と題されている。第1節では、タイの経済成長がきわめて好調であり、インフレの抑制にも成功していることが概観される。第2節では、それにもなると所得格差の拡大、精神衛生の悪化、犯罪率の上昇、自殺率の増大などさまざまな社会問題が噴出していることが述べられる。第3節では、個人的成功への期待がきわめて高いにもかかわらず、それを可能にする条件が存在していないとされ、本論文全体の導入部をなしている。

第2章は「理論枠組み：新しいパラダイムの提示」と題されており、スタレーやムルダーをふくむ従来のタイ研究の概観をおこなう第1節、デュルケーム、ゴフマン、マートンにもとづいて理論枠組みの提示をおこなう第2節、それにもとづいて従来のタイ研究の批判をおこなう第3節、データに関する方法論が述べられる第4節から構成されている。理論枠組みとしては、デュルケームから聖と俗の2分法を採用し、マートンのアノミー概念によってデュルケームを補完している。こうして、規制-無規制軸と道徳性-無道徳性からなる2次元の図式が提示され、聖性は規制軸と道徳軸の頂点に位置づけられる。その結果、スタレーについてはデータの収集はあるものの理論がないとされ、ムルダーについては道徳性と非道徳性の2分法では聖性をカバーできないという批判がなされる。

第3章は「儀礼の崩壊」と題されている。第1節では、タイ人の仏教に対する信仰が弱まっていることが1995年の調査結果にもとづいて分析されている。教義についての誤解が一般化しているばかりでなく、現世利益の追求のための呪物崇拜への退廃が進行している。第2節では、性、年齢、居住地、所得別に信仰心の現況が概観される。成功への希望の強い男性、若年、低所得、バンコク居住者に信仰心がとぼしい。日系企業従業員を検討する第3節でも同様の結果が示される。第4節では1981年の調査結果との比較がなされ、14年間に信仰心が喪失したことが主張される。

第4章は「俗の支配：呪物の隆盛」と題されている。第1節は1995年現在のタイ人の価値体系の検討に当てら

れ、目的価値と手段価値についてもっとも重要なものおよびもっとも重要でないもの5項目ずつの調査結果が、性、年齢、居住地、所得別に分析される。要約すればタイ人は成功という無道徳的価値基準を強くもっており、その達成手段がないときにはマートンのいう儀礼主義的行動に走る。第2節では1981年の調査結果との比較がなされている。第3節ではこのような俗の支配が形成された社会的背景として、華僑・華人の実業界における優越が指摘されている。第4節においては、日系企業の女性従業員では家族と結婚が、男性エンジニアでは職業的成功が求められていることが明らかにされる。

第5章は「希望の種子」と題されている。第1節では社会的善に対するタイ人の要求が高まっていること、タイ仏教界のなかでも改革へと指向するグループが生まれていることなど、聖性の復活への胎動が紹介される。第2節は、タイの経験がとりわけ東南アジアの他の社会にとって否定的モデルとしての役割を果たすと主張される。第3節ではすべての存在は無常であるから、タイのアノミー状態も永続することはないだろうという希望が述べられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文がタイというマクロな全体社会の変動を理論的にも実証的にも体系的に把握しえたことは高く評価される。これを更に敷衍すれば、本論文のメリットは次のような諸点にある。

(1)上座部仏教の占める位置に関して聖一俗という宗教社会的カテゴリーを適用して鋭い分析をおこなっていること、(2)質問票をもちいる量的データを識者へのインタビューなどの質的データで補完し、情報の信頼性が高いこと、(3)1981年と1995年の2時点の比較により、動態を分析していること、(4)従来のタイ研究について、動態性や実証性の欠如などによる限界を指摘していること。

ただし、(1)特に聖化れた権力をどう把握するかについて、聖性の定義に関する若干の混乱がみられ、また、(2)アノミーと成功に指向する利己主義との間の概念的関係についてやや明瞭性を欠く部分があり、さらに、(3)目的価値と手段価値の弁別の基準がそれほど厳密ではないなど不十分な諸点があるが、いずれも本論文の価値を損なうほどのものではない。

よって、著者は博士(社会学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。